

ハーモン

『商品準備通貨—第一次商品生産者の所得安定に関するグレー・アム・ホードリアンの提案—』

逸見謙三

ここに書評しようと思うのは Elmer M. Harmon, *Commodity Reserve Currency: The Graham-Goudrian Proposal for Stabilizing Incomes of Primary Commodity Producers*, 1959, pp. 139 である。本書の出現は (a) グレー・アム・ホードリアンの提案が、又カーター等の国連の委員会の勧告（一九五三年）が、依然として検討され続けていることを物語っている。高度の国際協力が必要とする、いわば理想案ともいわれるべきこの提案は忍耐強く検討され、勧奨され続けることなくしては実現されない。この意味で、本書の出現自体が、経済学者が経済的厚生の問題に、真剣に取り組んでいる証拠として歓迎されるべきである。

書評 『商品準備通貨—第一次商品生産者の所得安定に関する G・ホードリアンの提案—』 一八三

る。(b) 又、本書はこの提案の骨格と、これに伴う殆んど凡ゆる論議（例えば従来論議の対象となること甚だ稀であった国連又はオランダの *Compensatory arrangement* ないしは *mutual insurance scheme* も含んでゐる）の検討を簡明かつ明確な形でなしている。しかも、評者の判断によれば、論議の進め方は一般に極めて妥当である。従って本書は第一次商品生産者の所得安定に関する問題へのよき入門書の役割を果たすであらう。

(c) 本書の最大の功績は *tangent kicker*（第五章）の提案である。これは商品準備通貨案ないしは緩衝備蓄案の最大の弱点に対する解決策を提供するものである。いうまでもなく、これ等両案は所得ないしは市場の安定と、市場状況の変化に対する生産の適応（資源の適正配分）とを同時に達成しようとするものである。この際問題となるのは安定さるべき水準の決定である。これが固定的なものであってならないのはいうまでもない。更に自由裁量の余地の小さいものでなければならぬ。（これが大きいと種々の圧力によって運営が順調でなくなってしまう。）*tangent kicker* は安定の水準の変化を、単に市場価格の移動平均のみならず、備蓄の大きさとも結びつけてこれ等の問題を解決せしめようとするものである（五〇頁）。*tangent kicker* の長所は (i) 備蓄の過度の膨張や消耗を防止しうること、

(ii) 安定水準の決定式が簡単であることの二つにあるように思われる。しかし屈伸性係数 (coefficient of flexibility, これは、この商品準備通貨案の運営に必要とされる初期の備蓄の規模に対して、許容される備蓄規模の変化の巾が示す割合の係数⁶) を以て示す。その巾を超すと購入しないしは販売価格が変り、それらの移動平均たる安定水準も変化する。) の如きは一層の吟味を必要としよう。

さて本書で扱われている商品準備通貨案はフリードマン流の貨幣改革案ではなくて、ペンネット (スタンフォード大学食糧研究所) 流の緩衝備蓄案としての、複合商品単位準備 (multiple-commodity-unit reserves) 案としての商品準備通貨案である。その限りでは本書は複合商品単位 (composite commodity standard) の具備する条件とか、その通貨単位の適格性とかいった種々の制約から自由である (この問題および以下に述べる諸問題に関しては、拙稿「商品準備通貨案について」『農業総合研究』、昭和三十一年一月号所収を参照されたい)。しかし複合商品単位準備 (individual commodity reserves) と個別商品準備との長短の比較の如きは本書においてもとなされるべきではなかったか。両案の比較に関しては従来から多数の論議がなされ、両案の全休としての長短は容易に決定しえない処である。しかも両案はその前提を全く異にしているのである。

これ等の慎重な検討はハーモンの論調に重大な変更をもたらすように思われる。例えば生産者 (消費者) の圧力に関する考慮は複合商品単位準備を著しく有利にするであらう。ハーモンはこの点を重要視している。しかし生産者 (消費者) 利益が一方的に主張されるような経済は、どちらかといえば国際主義経済よりも国民主義経済なのであって、そのような経済では商品準備通貨案のような提案は容易に受け容れられそうもない。

細部において本書はいくつかの長所と欠点を有している。第一〇章備蓄規模の計測、第一章融資の費用の二章も秀逸である。但し第一〇章の計測に際しての前提、商品単位をなしている商品グループに対する需要の所得弾性は一であるという主張は再考を要するであらう。

国際小麦協定に関するカルドアの提案に対する批判 (二二頁) は不当にきつい。ハーモンはここでカルドアの二重価格方式が能率の低い生産者をして価格下落にも拘わらず生産転換を早急になさしめないといっている。しかし長期には生産転換は可能であり、短期的には能率の低い生産者と雖も保護さるべきではないかと考えられる。又一三頁の式の説明は不十分である。

ともあれ、一般に妥当であり、しかも極めて明快である敘述と tangent kicher の提案とは本書をしてこの分野における必読の文献たらしめるであらう。